

## 精神科ソーシャルワーク実践におけるオープンダイアログの活用に関する考察 —その効果と課題について—

○ 同志社大学大学院博士後期課程 氏名 羽鳥 恵一 (会員番号 9628)

キーワード：精神科ソーシャルワーク・オープンダイアログ・間主観性

### 1. 研究目的

精神保健医療福祉の実践現場において、近年オープンダイアログ（以下、OD）という技法が注目を集めている。この実践は、クライアントやその家族等から依頼を受けた病院のスタッフが24時間以内に治療チームを結成し、クライアントの自宅を訪問して本人や家族、その関係者を交えた対話を行い、以降も定期的に自宅訪問をして、対話を繰り返すというものであるが、これには従来のソーシャルワーク実践理論にも共通する視点が少なからず含まれているのではないかと考える。例えば、ODのセッションで必ず本人を交えて対話を行うといった視点はソーシャルワーク理論における自己決定の原則に、本人と周囲の人たちとの関係性を重視する視点はエコロジカルモデルに共通するものであろう。さらに、本人の病的な部分ではなく、健全な部分に焦点を当てる視点は、ストレングスアプローチにも通じるであろう。中には、ODと「べてるの家」におけるミーティングや当事者研究といった取り組みに共通点を見出す指摘もあり(斎藤 2015:61-63、向谷地 2017)、今までの精神科ソーシャルワークの実践においても、ODにおける視点は少なからず取り入れられてきたのではないかと考えられる。

ところで、このようなODの技法を精神科ソーシャルワークの実践現場で用いる場合、確かにクライアントに対して有用性が認められる一方で、実際の活用には様々な困難も想定される。そのため本研究では、精神科ソーシャルワークの実践場面でODを活用した際に考えられる効果と同時に、そこでの課題を検証することを目的にしたい。

### 2. 研究の視点および方法

本研究では、ODやソーシャルワーク理論に関する文献を紐解くことで、ODの理論と従来のソーシャルワーク実践理論との共通点を明らかにする。その上で、実際にODを用いた精神科ソーシャルワーク実践の事例を取り上げて分析することで、その効果と課題について検証する。

### 3. 倫理的配慮

本研究では、ODを用いた具体的事例を提示する。それにあたり、「日本社会福祉学会研究倫理規定」を遵守し、実際にODによるセッションにかかわった本人及び家族に対し、事例提供の趣旨、学会や論文等で発表すること、またその際の守秘義務の遵守、事前に記載内容を確認していただき、加筆・修正・削除などが可能であること、場合によっては協

力を拒否することができることなどを文書で説明し、それぞれ協力の同意書に署名をいただいた。また、本事例の提示については、X 病院内の倫理委員会の承認（2019 年 11 月 27 日承認：第 20191127-1 号）を得た。

#### 4. 研究結果

OD の理念とソーシャルワークの実践理論を比較検討することにより、OD が従来のソーシャルワークの価値や理念と共通する部分が多く、その方法論もソーシャルワークの実践理論と少なからず通じるものであると理解することができた。

また、実際に OD を用いた事例を分析することにより、セッションの時々で本人及び家族の思いを語りとして引き出すことができ、参加者それぞれに気づきをもたらされること、さらに定期的にセッションを行うことで、その後の取り組みへの方向性が明確になるといった効果が得られることも明らかにすることができた。

その一方、OD を用いるにあたり、①OD のセッション前に、参加者それぞれの思いを聞き取るといった事前準備を念入りしておくことが、セッションにおける対話のあり方に影響すること、②セッションの内容は毎回不確定なため、参加スタッフにはその都度で生じる対話への対応力が求められること、③セッション中、適宜リフレクティングを挟むことで、セッション参加者に内的会話をもちたす機会を作ることが参加スタッフに求められること、④セッション中、参加スタッフには、それぞれの参加者に生じるであろう内的対話に想像力を働かせることが求められること、といった、複数の課題も併せて明らかにすることができた。

#### 5. 考察

OD はソーシャルワークの理念との共通項が認められるため、比較的スムーズに日常的な実践に導入することができると思われる反面、上記のような課題もあるため、用いるソーシャルワーカーの力量が問われる技法であるとも考えられる。しかし、実際の実践報告でも OD の効果が検証されている現状（下平 2018、矢原 2016）を鑑みると、発表者はソーシャルワーク実践の場面で OD の技法はより広く用いられるべきであると考えている。そのためにも、ソーシャルワーカー自身の自己研鑽と共に、OD の技法をより使いやすいものに修正する工夫が求められているのではないだろうか。その意味で、精神科ソーシャルワーク実践における OD は、まだまだ発展途上にある支援技法であると言えるであろう。

#### 【参考文献】

斎藤環（2015）『オープンダイアログとは何か』医学書院。

向谷地生良（2017）「べてるとオープンダイアログ」『精神療法』43(3)、pp. 363-368。

下平美智代（2018）「フィンランドのオープンダイアログ：現地での臨床活動の実際」『精神科治療学』33(3)、pp. 305-310。

矢原隆行（2016）『リフレクティング：会話についての会話という方法』ナカニシヤ出版。